様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００６０５

研究課題名（和文）現代日本語の文法体系における格体制の交替現象の位置づけ：関連諸現象との比較から

研究課題名（英文）The position of case pattern alternation phenomenon in the grammar system of modern Japanese: From comparison with other grammatical phenomena

研究代表者
川野　靖子（Kawano, Yasuko）

埼玉大学・人文社会科学研究科・准教授

研究者番号：００３６４１５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：現代日本語には、「壁にペンキを塗る／壁をペンキで塗る」「グラスに水を満たす／グラスを水で満たす」のような格体制の交替現象が見られる。本研究では、この現象がどのような原理で成立するのかを考察した。類似点を持つように見える他の現象（多義語、メトニミー、ヴォイス等）と比較することにより、当該現象の成立原理の特徴を明らかにし、日本語の文法体系における当該現象の位置づけを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
格体制の交替現象に関する従来の研究では、類似点を持つように見える他の現象と比較するという視点はほとんどなかった。また、多義、メトニミー、ヴォイス等についても先行研究の蓄積があるが、多くはそれぞれの分野内での研究に留まっていた。本研究において、格体制の交替現象とこれらの現象の比較を行ったことにより、格体制の交替現象の成立原理の特徴が明らかになり、さらに、比較対象とした各現象の特徴や相互の関係についても明確にすることができた。

研究成果の概要（英文）：In modern Japanese, a certain class of verbs such as "nuru (smear)" and "mitasu (fill)" causes an alternation of syntactic frames as demonstrated in "kabe-ni penki-wo muru / kabe-wo penki-de nuru", "gurasu-ni mizu-wo mitasu / gurasu-wo mizu-de mitasu". This study examined the mechanism of this phenomenon. By comparing this phenomenon with other phenomena (polysemous, metonymy, voice, etc.) which seem to have similar points, this study clarified the characteristics of the mechanism of this phenomenon, and showed the positioning of this phenomenon in the Japanese grammar system.

研究分野：日本語学

キーワード：格体制の交替現象　多義　メトニミー　ヴォイス　格交替

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の研究対象である「格体制の交替現象」とは、次のような現象である。

(例 1) a. 壁にペンキを塗る　　b. 壁をペンキで塗る
(例 2) a. グラスに水を満たす　　b. グラスを水で満たす

上記の(例 1)では、「塗る」という動詞が、「～ニ～ヲ」と「～ヲ～デ」の 2 種類の格体制をとっており、しかもこの 2 文がよく似た意味を表している。(例 2)が示すように、「満たす」という動詞も同じ現象を起こす。格体制の交替現象とは、こうした、同じ動詞が 2 種類の格体制をとり、しかもその 2 文がよく似た意味になる現象を指す。このような現象を起こすのは一部の動詞に限られているが、興味深いことに、英語等の他言語でも、似たような動詞が同じ現象を起こすことが報告されている（e.g., He smeared paint onto the wall. / He smeared the wall with paint.）。つまり、この現象の背後には、かなりの程度普遍的な原理があると考えられるのである。このため、各言語において、これまで多くの研究がなされてきた。筆者自身も、過去の科研費による研究において、従来知られていなかったタイプの交替も含めて、現代日本語における格体制の交替現象を体系的に記述し、この現象の成立条件と成立原理について考察してきた。

しかし一方で、従来の研究では、格体制の交替現象をそれぞれの言語の文法体系の中に位置づける試みはほとんどなされていない。これは、現代日本語に関しても同様である。一部の先行研究で、「多義」「メトニミー」、「ヴォイス」、「格交替」との関連が指摘されることがあるが、格体制の交替現象とこれらの現象とが具体的にどのような関係にあるのかが明らかになっているとは言い難い。格体制の交替現象とこれらの現象の間には、確かに、類似点があるようにも見えるが、それが果たして原理的なレベルでの共通性によるものなのか、それとも表面的な類似点に過ぎないのかといった点も検証する必要がある。

２．研究の目的

上記「1.」で述べた背景を踏まえ、本研究では、格体制の交替現象と、類似点を持つように見える他の現象（多義・メトニミー、ヴォイス、格交替）との比較を行う。これらの現象間の異同の背景を追求し、成立原理の違いと相互の関係を明らかにする。これにより、格体制の交替現象の成立原理の特徴を明確にし、現代日本語の文法体系における当該現象の位置づけを明らかにすることを目指す。

３．研究の方法

ある文法現象の、その言語の文法体系全体の中での位置づけを探ろうとする時には、他の現象との類似点に目が行きがちであるが、本研究では類似点だけでなく相違点にも目を向ける。その上で、そのような類似点や相違点が生じる背景を、原理的なレベルで明らかにする。また、現象の成立原理の解明には、現象の成立条件の抽出が不可欠であるが、その際、「現象が成立するケースだけでなく、成立しないケースにも注目し、両者を比較する」という方法を徹底する。これによって、現象の成立条件を明示的かつ予測可能な形で示すことが可能になると考える。また、ヴォイスとメトニミーの定義に関して研究者間で幅がある現状を踏まえ、これらに該当する可能性のある事例は幅広く研究対象とし、格体制の交替現象との比較を行う。

４．研究成果

本研究の主な成果をまとめると、次の(1)～(3)のようになる。

(1)交替動詞と多義・メトニミーの違い

既に多くの研究で指摘されているように、「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」は意味類型が異なり、前者は位置変化を、後者は状態変化を表すと考えられる。つまり、格体制の交替を起こす「塗る」等の交替動詞は、位置変化用法と状態変化用法の 2 つの意味を持つということである。しかし、「2 つの意味を持つということは、交替動詞は多義語ということなのか」「多義語ではないとしたら、交替動詞における位置変化用法と状態変化用法の関係と、多義語における意味間の関係とは、どのように異なるのか」という問題は、あまり議論されてこなかった論点であり、曖昧なままだった。本研究ではこの点を考察し、以下のことを明らかにした。

①「汗が<u>吹く</u>」と「風が<u>吹く</u>」（メトニミーによる多義）、「この味噌は<u>甘い</u>」と「彼は娘に<u>甘い</u>」

（メタファーによる多義）のように、多義語が表す複数の意味は、関連はするが違いが明らかであり、別義として捉えられるものである。これに対し交替動詞が表す位置変化の意味（e.g., 壁にペンキを塗る）と状態変化の意味（e.g., 壁をペンキで塗る）は、一見、同義にみえるほど、よく似ている（別義とするには似すぎている）。よって、交替動詞は多義語ではないと考えられる。交替動詞も多義語も、「関連する複数の意味を持つ語」ではあるが、「関連する複数の意味」と言った時の「関連」のあり方が異なると考えられるのである。

②多義語における意味間の違いは、現実世界における指示対象の違いにあると考えられる。たとえば、「汗が吹く」と「風が吹く」のようなメトニミーによる多義では、2 つの意味は、一続きの大きな事態の中の別の段階をそれぞれ指示するという関係にある。関連はするが別の事態であるという点がポイントであり、同一事態を指示するのではないという点が、多義語の特徴である。

③これに対し、交替動詞における「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」の関係は、「現実世界の同一事態を指示しつつ、それを別の類型に当てはめて（前者は位置変化として、後者は状態変化として）述べる」という関係にあると考えられる。「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」が、一見、同義のように見えるのは、現実世界の同一事態を指示しているからであり、一方で格体制が異なるのは、その同一事態を、どのような類型の事態として捉えているかが異なるためである。

④格体制の交替現象を取り上げた研究の中には、「焦点化」によってこの現象が成立すると考える研究があり、さらに、これをメトニミーと同じ原理とみる研究もある（西村 2002 等）。上記①～③から明らかなように、本研究の見解は、こうした見解とは異なるものになる。これらの研究のいう「焦点化」は、「汗が吹く」と「風が吹く」のようなタイプの多義語の事例に当てはまるものであり、格体制の交替現象はそれとは異なる原理で成立するというのが、本研究の見解である。

(2)「交替動詞」「多義語」「ヴォイス対立」の関係

文の表す意味内容を「事柄的意味の層」「叙述事態の層」「通達機能の層」に分けて多層的に捉えた仁田(2007)の枠組みを援用し、さらに「現実世界の事態」のレベルを加えることによって、「交替動詞」「多義語」「ヴォイス対立」がどのような関係にあるのかを考察し、以下のことを明らかにした。

①多義語における意味間の異なりは、現実世界の指示対象の異なりにあると考えられる。
②これに対し、交替動詞における「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」の意味の違いは、事柄的意味の層にある（現実世界の指示対象は同一である）。
③ヴォイス対立における能動文と直接受動文の意味の違いは、叙述事態の層にあると考えられる（現実世界の指示対象は同一であり、さらに、事柄的意味も同一である）。
④上記①～③を整理すると、交替動詞、多義語、ヴォイス対立の関係は、下記のようにまとめられる。

現実世界の事態　……多義語における各意味の違い
事柄的意味の層　……「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」の意味の違い
叙述事態の層　……ヴォイス対立における意味の違い
通達機能の層

(3)「格体制の交替現象」と「格交替」の違い

格体制の交替現象が、意味類型の交替（位置変化か状態変化か）によって起こるのに対し、格交替は、個々の格成分間の意味役割の近さによって起こると考えられる。たとえば「～ガ～ニあふれる」と「～ガ～デあふれる」のニ格句とデ格句は、ガ格句の事物の内在物か非内在物かという点で異なるものの、どちらも状態変化事態における「構成物」の役割を担う。そのため、内在物とも非内在物とも解釈可能な名詞が立つ場合には、「街が 活気に／で あふれている」のように、ニ格成分とデ格成分の間で格交替が起こる。

以上のように本研究では、格体制の交替現象と、他の現象との関係を分析し、日本語の文法体系における当該現象の位置づけを明らかにした。格体制の交替現象については従来から研究がなされてきたが、類似点を持つように見える別の現象と比較するという視点はほとんどなかった。本研究においてこのような視点から研究を行ったことにより、これまで曖昧だった論点についても考察が進み、格体制の交替現象の成立原理の特徴が明確になったと考えている。また、多義語やメトニミー、ヴォイス、格交替についても先行研究の蓄積があるが、多くはそれぞれの分野内での研究に留まっている。本研究において、格体制の交替現象との突き合わせを行ったことで、各々の現象の特徴も、より明確になったと考えている。

[引用文献]

西村義樹(2002)「換喩と文法現象」西村義樹編『シリーズ言語科学 2 認知言語学Ⅰ:事象構造』東京大学出版会.

仁田義雄(2007)「日本語の主語をめぐって」『国語と国文学』84-6, 東京大学国語国文学会.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 川野靖子	４．巻 55-2
２．論文標題 壁塗り代換における位置変化用法と状態変化用法の関係について―多義との違いは何か―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 埼玉大学教養学部紀要	６．最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24561/00018933	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川野靖子	４．巻 54-2
２．論文標題 A Critical Review of English Locative Alternation Studies: Proposal for Distinguishing between Alternating and Non-alternating Verbs	５．発行年 2019年
３．雑誌名 埼玉大学紀要　教養学部	６．最初と最後の頁 17-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 川野靖子
２．発表標題 壁塗り代換と「多義」
３．学会等名 第15回現代日本語文法研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 川野靖子	４．発行年 2021年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 296
３．書名 壁塗り代換をはじめとする格体制の交替現象の研究：位置変化と状態変化の類型交替	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関